推 薦 図 書

学　科：　看護学部	氏　名：　鶴岡 イツ子
書　名：　生命の倫理　その規範を動かすもの	
著者・訳者：　山崎喜代子編	
出　版　：　九州大学出版会　2004	

〈推　薦　文〉

編者である山崎の「はしがき」には生命科学、特に1953年のDNA発見以降、発展している遺伝子複製機構の解明からヒトゲノム解読までの豊かな成果について著している。今では、米国の「デザイナーベイビー」「パーフェクトベイビー」等の「生」の設計等もみられてきており、生命倫理学の真価が問われるようになってきていることを著している。

第一部「生命倫理規範を探る」では、弱者保護・医療発達の文明は自然淘汰の抑制につながって、肉体的に精神的に虚弱なものが増える、富裕層における避妊の普及もある中、貧困層の多産は悪質な遺伝子が広がるとする考えにより優生学的な政策が展開され、1912年（第1回）からはじまった国際優生学会の開催はスエーデンで知的障害・精神障害患者への婚姻の禁止を皮切りに、1930年までに、30カ国以上で展開されていることなど、センセーションな内容を著している。

第3章において、天野有氏は「生命倫理（バイオエシックス）」という造語のルーツを紹介し、「生命と人権を守る運動」の根本問題「生命の神聖・尊厳（human dignity）問題の根拠を神学的倫理学の角度から著している。

第二部「生命倫理がたぐる社会政策」では、第4章において、人工妊娠中絶を含む生命倫理の諸問題では多くの議論が出尽くしておることを取り上げ、しかし、袋小路に墜ちいった現在の生命・環境倫理学の脈がまだあるならと、トムソンの「人工妊娠中絶の擁護」とトゥーリーの「人工妊娠中絶と新生児殺し」を取り上げ、第6章では、生命科学の発展は、伝統的な医療者の倫理だけでは扱うことができない問題を超えて全社会的な射程をもつ規範や制度に運営される必要性を著している。

第三部「生命倫理学成立前夜－優生学の慢心と暴走－」では、K・J・シャフナーは「米国優生政策の歴史」を著している。優生学の思想はイギリスで起こり、アメリカで根づいた。人種の未来「アメリカ生まれの白人中産階級の出生率の低下（労働者や移民者の増加）」から生まれる『人種自滅』の危機感から労働者や移民の出生の抑制等が進歩主義時代における新しい社会的関心となっていったことや進歩主義と優生学の結合と優生思想支持者の階層を著している。